「災害と子どものこころ」を読んで

東日本大震災からもうすぐ２年目を迎えようとしている。

あの惨状を目にし体験した子どもたちの心の痛み（喪失感等）については、先に当 HP で触れたことがある（HP「雑学 BN」の書籍等読後感関係（Ⅵ）、2011.11.10.「大震災と子どもの『PTSD』」、マスコミ等コメント関係（Ⅶ）、2011.12.08.「大震災後の子どもの『PTSD』の一症例を目にして」：参照）。

それだけに、復旧・復興の報道で屈託のない子どもたちの姿、笑顔を目にする時、その裏に隠されている心の痛みのサポートはどうなっているのか、気になっていた。

新聞書評の「東日本大震災直後から、専門家として子どもの精神的なケアに関わってきた３人の児童精神科医と、作家柳田邦男による報告と提言。被災直後に何より必要な『安心感と安全感』、ストレスと子どもの行動、深刻なトラウマ体験など、子どもに向き合う大人が認識すべき課題への理解を促す。」が目に留まり、４人の分担共著の「災害と子どものこころ」を購読した。

阪神・淡路大震災後、また、（原発事故を含め）東日本大震災後に被災地に入り子どものケアに携わった Dr の書だけに、数々の事例に触れながら、初期、中期、長期の子どもの精神的ケアのあり方、また、ノンフィクション作家でもある柳田邦男は、世界の、また、日本の子どものメンタルヘルス支援の歴史にも触れながら、社会として、更に行政として今後取り組むげき対策のアドバイス、ヒント、こころ支援のガイドラインが記されていた。

震災直後は生活環境が大きく変わったが、「子どもは、今を生きることに生きている」と云われるように、環境に順応しようとする柔軟性をもっているので、それが笑顔として表われていたのだろうと思う。

だが、あれだげの惨劇を体験しているだけに、トラウマや「PTSD」は、先々何かを切っ掛けに頭をもたげてくることがあるだけに、大人（親、、家族、親戚、保育士、教師、保健師等）の子どもの変化をまずは見逃さないこと、更に、自分で解決しようとせずに専門家に相談することの必要性を事例を通して記されている。

震災被害からほぼ２年経つが、子どもの最も身近にいる大人自身が被災者でもあり、まだまだ「安心感と安全感」を実感できない状況だけに、誰もが癒しを味わうことの出来る故郷の喪失を感じさせないように、行政が復旧・復興・除染を急ぐべきと、つくづく思う。

阿部幸泰　　（2013 年 1 月 13 日　記）